

式辞（平成26年度）

平成26年度入学式にあたり、お祝いと歓迎の言葉を申し述べます。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本学教職員一同は皆さんの入学が決まったそのときから、今日の日を心待ちにしておりました。私どもは毎年新入生を迎えているわけですが、人間の出会いは常に一期一会のものであり、毎年の出会いの感動は常に新鮮です。お互いに、この感動を大事に守ってゆきたいと思います。

始めにあたり、所信の一端を申し述べます。

かつての教育がどうであったかを一括りにすることはできませんが、一般的には、教える側が教えられる側に一方的に知識を与えるというものでした。これが一定の効果を収めてきたことは疑いないものの、それでは効果も限定的であるという反省から、教育界全体で、とりわけ大学教育において、改革が叫ばれています。本学としても、もうかなり前から、学生の主体的な学びを促進すべく、検討を重ねています。

古い体質と言われたかつての教育の現場であっても、「馬を水のある場所まで連れてゆくことはできても、飲む気のない馬に水を飲ませることはできない」と言いならわされてきました。学生を馬に喩えるのは気の引けることですが、要するに、「勉強する気のない人に教えるのは無理だ」という意味でしょう。それは、「教える」という作業は他人にできて、「学ぶ」という作業は本人にしかできない、と言い換えることもできます。大学はそういう意味での「学びの場」ということを、ここで再確認していただきたいと思います。当然のことながら、学生諸君には、ただじっとして何かを与えられるのを待つのではなく、自ら進んでその「何か」を取りに行く、という姿勢が求められます。

では、その「何か」とは何か、という問題になります。それはひとことで言い表されるものでないことは言うまでもありませんが、あえて申し上げれば、どの分野であれ、そこには基本的な「型」というものがあります。その型をきっちりとして修得した人が、つぎの段階で独自の型を作りあげることになります。かたちから入ってかたちを突き抜けることが何によらずすべての習い事の基本なのであって、皆さんはそのプロセスを主体的な学びを通じて自分のものにするために本学に入学されたのだということを、まず申し上げたいと思います。

たとえば茶道の達人のお点前を拝見すると、まるで作法など関係ないかのように自由に振舞っているように見えますが、その自由さには流動感やめりはりがあって、その世界に不案内な者が見てもとえようもなく美しく感じられます。作法を完璧に自分のものにするによって自由さを獲得しているのです。

また、ピカソをはじめとするキュビズムの画家たちのように、現実をデフォルメしたような絵を描いた人の若い頃のデッサンを見ると、その見事に驚嘆させられます。現代の優れた抽象画家・抽象彫刻家についても同じです。彼らはデッサンを究めることで、目に見える現実世界を突き抜けたその先まで見えるようになったのです。

スポーツの世界では、初めのうちはひたすらコーチの指示に従うことを求められます。そこでは個性などまるで抹殺されるかに見えます。しかし、野球に例をとれば、名選手と言われる人たちが、それぞれ独自のフォームを持っていることが注目されます。バッターにしろピッチャーにしろ、フォームを見ただけでそれが誰だかすぐに見分けられるほどです。彼らが初めからそのフォームを持っていたはずはありません。コーチの指示で決まった型を練習し、練習を重ねてついにそれを習得し、さらにそこを突き抜けた段階で自分独自のフォームに到達したわけです。はじめから自己流を編み出す選手が大成するはずはありません。

大学での勉強も同じです。学生の主体的な学びを尊重するといっても、学生が自由に言いたいことを言ってそれで終わり、ということではありません。それでは敢えて大学に入った意味がありません。教員にはそれぞれ伝えたい型というものがあります。思考方法や研究方法といったものにも、基本的な型があるのです。学ぶ人は、それをまず自分のものにし、さらにそこを突き抜けて自分独自の型に至ることが求められます。教員は学生の自由な発想を大事にしながらも、

指導しています。指導する側とされる側とのあいだに十分な対話がなければ指導は大きな効果をあげることができません。そして、そのようにして覚えた型だからこそ、やがてその型を乗り越えてゆくことができるのです。そのような体験を皆さんはこれからしようとしていることになります。

新入生諸君が、本学の教育の趣旨をよく理解し、努力することによって、将来につながる確かなものを身につけられることを祈っています。

終わりに、ご列席のご家族の方々にお祝いとお礼を申し上げて私の式辞といたします。

平成26年4月2日

共立女子大学
共立女子短期大学
学長 入江和生